

---

# お嬢様とお手伝いさん 2 夕食の一時

仙人掌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様とお手伝いさん2 夕食の一時

### 【EZコード】

N5472D

### 【作者名】

仙人掌

### 【あらすじ】

茶髪のお嬢様と毒舌なお手伝いさんの夕食の時の会話です。基本的に前作を読まなくても読めます。

「椿お嬢様、お食事ができました」

「わかつたわ咲羅・・・って何じやこりやああああああああ？」

普通の一戸建てとやうまでは大差ない屋敷。 irgendも少女の叫びが響き渡る。

「どうなさいましたか？頭がおかしくなりましたか？ああ、すいません。元からでしたね」

「余計悪くなつてゐわよつてか、おかしいのは咲羅の作ったメニューでしきつ！」

大きめのテーブルには実においしそうな料理が並んでゐる。問題は茶髪の主人側のメニュー。ざるそば、麻婆豆腐少量、パンひとつれ、レモンティー、デザート[ミルクパフェ]、オムライス。

「量は何とか食べれやうだかど、何でここまドバラバラな組み合せなのよー。」

「あまりモノを一括処分しようとしたら困りました。私の心配は要りません。ちゃんと別の料理を用意しますから」

「誰もあなたの心配なんかしてないわよつ！第一あたしはダイエット中だからテザート要らないつて要つたのにパフェがあるのよー。」

「こやがらせです」

「やつぱりと言いつ切りやがった？！てがあんた本当にメイドっ？」

「違います。メイド服を身にまとつてこなつと私はお手伝いです」

「そりゃ辯を何で氣にするのよ・・・」

「椿お嬢様」こときが気にする」とではありますん

「う」とせ?—そこまで私のことが嫌いなの・・・」

「まあ割と」

・・・アンタって人はああああああああ！！」

一 夕食前は静かにソトヒテモ

あ……また夕食始まつてなかつたんだ」

「椿お嬢様がケチをつけるからでしょうね？ 食べさせてもらえるだけでもありがたいと思つてください」

「もう滅茶苦茶じゃないのー。ちと食べましょー」

「そうですね、これ以上椿お嬢様の戯言に付き合つていったら料理も冷めてしまいますね」

「怒」

「「いただきます」」

少しの間の沈黙。食器の音のみがきこえる。そんな沈黙に耐えかねたのか、考えがまとまつたのか椿が口を開く。

「咲羅……本当にあたしのこと嫌いなの？」

シリアスマードが漂う。姉のように慕っていた咲羅にハツキリと嫌いと言われたのは椿にとってそれなりにこたえたらしい。

「そんなことありませんよ。椿お嬢様をからかうのが楽しいだけです。それなりに嫌いな点はありますが」

「からかうのにだつて限度つてモンがあると思つんだけど……？」

シリアスマードはたつた数行しか持たなかつたらしい。シリアスにする必要もないけれど。

「まったく咲羅は……そういうえば今日は私のほうが帰るの早かつたけどどうしたの？」

「彼氏とデート」

「ってアンタ彼氏いたのぉおお？？！」

「はい、私はお手伝い兼大学生なのでそれくらいはおかしくないと思いますが。多少ヲタク趣味が入つた椿お嬢様と違つて」

「うぬわこ、うぬわこ、うるわーい！」

「…………たまりすぎた」ミックやゲームの一部を処分する私

の気持ちにもなつて下さこ

「わたしのゲーム&コニックかつてに処分したのあんただつたのね  
！」

「ええ

「ここのひ・・・

なんの悪びれもなく咲羅に対し椿はついにマジギレした。といつ  
り何かが割れた。

「つああああああああ…！」

椿は咲羅に攻撃した。

ヒヨイッ

しかし万能お手伝いさんには止まつて見えた。咲羅の攻撃。

ブワッ・・・・ドスン！

椿は投げ技を食らった。快心の一撃。椿に999のダメージ。

「ちよつ・・・いたたた。なにすんのよ…」

「正当防衛です」

「・・・・過剰防衛つて言葉もあるのよ。あーはあやつ・・・」

「椿お嬢様の腕もまだまだですね。男に襲われた時どうすんですか。あ、お嬢様のその貪相なスタイルで「だまりなさいっ！」

そこは椿のコンプレックスでもある

「はあ・・・咲羅の彼氏ってのはよくこんなとせき合ひえるわね。どんな人なの？」

「アハハハハハハハハ！」

「聞けよつー！」

「椿お嬢様に言つて何の利益があるのですか？そんな意味のないことをして何になるのツラつのですか？」

「いや、ナヒメで言わなくともこいじやないの」

「そんなことより自分の彼氏を探したらどうひります？」

「余計なお世話よー！」

「ナツですか、出すぎた真似をしました」

「なんであなたはたまに急に素直なのよ・・・・・」

「早く食べてください、あまり遅いとスタイルよくなつませんよ？」

「完璧なまでに関係ないでしょ！がつーあーホント」「咲羅の彼氏の顔が見てみたいわよ」

咲羅が少し顔を赤らめて・・・

「優しい、良い人です・・・」

「勿論やがつたよ、細生……」

「ほら、食器もう洗いますよ」

「わかつたわよ、少し待つてみる」

といつてラストスパート

「ナニア、何で泣く？...」

噛んだ

「はい、ごちそつさまです。椿お嬢様」

屋敷内のとある一角。そこにいる人物は哀愁の混じつた声で呟く。

「私の出番はいつになつたら来るのでしよう……」

いまだに登場できない執事がいたりしたのだつた。



(後書き)

・ ぶつひやけ削除したいんですけど跡地として残しておきます・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5472d/>

お嬢様とお手伝いさん2 夕食の一時

2010年11月9日14時37分発行